

# Group Members 2015



**Masumi Sato**  
佐藤ますみ (隊員：米山支団)

半年という長丁場で、モチベーションを保つこと、隊員全員で意思疎通を図り、チームワークを高めることに腐心しました。訓練中は、うまく動けないこともあり、何度となく心が折れました。しかし、仲間、家族、消防団員の皆さんの支えがあり、乗り切ることができました。本当に感謝しています。

**Mitsue Chiba**

千葉美津恵 (隊員：迫支団)

子育ても一段落し、何かに挑戦したいと思っていました。選手を募集しているとの話を聞き、手を挙げました。仕事と家庭の両立、そして訓練参加のための時間調整は思っていた以上に大変でした。大会は支援ということで、葛藤はありませんでしたが、一丸となり一つの目標に向けて努力できたことが、この挑戦での収穫です。



**Mutsumi Takeda**

武田睦美 (隊員：米山支団)

隊員の年代構成が幅広かったので、いかに「心一つ」になれるかと考えていました。この半年間、自分の中でさまざまな葛藤がありました。しかし、多くの皆さんの支えにより、感謝の気持ちを持って終えることができました。同じ目標を持ち、心一つに過ごした半年は、私の宝であり、誇りです。

**Ayana Asai**

浅井彩奈 (4番員：南方支団)

訓練が始まってすぐの規律訓練は、動作を覚え周りと合わせることに苦労しました。本番が始まってからは無我夢中で、ほとんど覚えていません。気づいたら始まり、気づいたら終わってしまいました。この半年間、一つの目標に向かって努力し、それをやり遂げられたことは、消防団員として一つ成長できたと思っています。



**Manami Suzuki**

鈴木愛美 (補助員：米山支団)

支団での演習でポンプ操法を経験。これまでの訓練の成果を生かしたいと思い、手を上げました。上位入賞を目標に、日々訓練。動きの中でうまくいかないところがあり、訓練前に自宅で練習を重ねました。本番では、力を出し切れて、ほっとしました。チームが一つになって流した涙は忘れられません。



努力を重ねた「火消しなでしこ」たち。この半年間を振り返る。



**Suzue Suzuki**  
鈴木すず江 (隊長：米山支団)

消防団には、旧米山町で女性消防団を立ち上げる時から携わってきました。選手ではなく、隊長という立場での参加。成功裏に終えるためには、いかにチームとしてまとまれるかだけを考えて行動してきました。この取り組みに快く送り出してくれた家族、そして協力いただいた全ての人たちに感謝しています。

**Nayoko Sakurai**

櫻井奈代子 (指揮者：米山支団)

女性消防団の幹部候補研修で、他県の参加者が熱く操法大会のことを熱く語ってくれました。登米市に出番が回ってくると聞き「熱さ」を体験したいと手を挙げました。この「熱さ」は、自分にとって本当に貴重な体験でした。大げさかもしれませんが、操法大会は今まで生きてきたことを表現する場でした。



**Megumi Suzuki**

鈴木めぐみ (1番員：米山支団)

年齢を重ねるごとに、熱い気持ちや何かに懸命に取り組むことがなくなっていました。今回、操法大会に参加する機会をいただき、熱い気持ちで半年間過ごせました。物事に挑戦するのに「年齢は関係ない」ということに気づきました。このような機会を与えていただいたこと、本当に感謝しています。

**Ai Iwabuchi**

岩淵亜衣 (3番員：米山支団)

友人に誘われ消防団に入り、同じ流れで操法大会に挑戦することを決めました。団員としての経験もなく、本当にゼロからのスタートだったので、いろいろと苦労しました。この半年間は、長いようで短い不思議な感覚の時間でした。操法大会を通じて、人とのつながりの大切さなどを知り、大きく成長できたと思います。



**Yoshie Umemoto**

梅本美江 (2番員：米山支団)

消防団に入ってから、操法大会への挑戦を決意。このめぐり合わせに感謝しました。訓練が始まってからは、自分の出来なさ具合に悩むこともありました。多くの人たちの支えがあり迎えた本番。「後悔をしない」ことを胸に臨みました。結果、これまでで一番の操法が出来たと思います。この半年は、長くても短い素敵な時間でした。



**優勝** 勝を目指し、1年以上の訓練を経て大会に臨むチームも少なくない。

そのような中、登米市女性消防団は、2015年4月から訓練を開始した。大会までの訓練日数は55日、訓練時間は130時間。メンバーについても、特別な選抜方式ではなく、女性消防団員からの手上げ方式で集め、その構成は20〜50代が集まる普通のものである以上、上位入賞を目指す。しかし、そのメンバーを能力の高い人だけを集めて特別編成にしても、現場の活動につながる。各支団の女性消防団員から希望者を募り、年代など全てのバランスを考慮して隊員を選んだ」とその選考理由を話す。

4月28日、訓練をスタート。当初の内容は規律訓練だけだった。規律訓練は、部隊行動時の立ち振る舞いを教育するもの。この訓練は7月上旬まで続けられた。また、実際にポンプを使用して放水するまでは、ポンプを使っている動きだけの訓練だった。「操法大会は採点競技で減点法。タイムも影響するが、基本的な動きができていないと点数は伸びない」と鈴木課長は基本

## 80秒から始まった操法 基本訓練で一步ずつ成長



①放水訓練初日、その水圧の強さに隊員一同驚いた②操法大会前、最後の訓練。4人の呼吸は乱れることなく、滑らかですばやい動きに。③訓練中盤、ポンプやホースなどの取り扱いにも徐々に慣れはじめた④訓練開始直後のホース延長。思う方向になかなかホースが伸ばせない⑤隊員たちが万全な訓練ができるよう、支援した消防団員。彼女たちの活躍は、団員の支援があったからこそ

的な動きの重要性を語る。まずは、基礎的、基本的な訓練を徹底した。

7月8日、初めての放水訓練。隊員たちの口から「ようやくここまで来た」との声が聞かれた。丸2カ月以上、動きだけの訓練だったので、ようやくポンプ操法をしていく実感が湧いた。この3日後、タイムを初計測。80秒だった。入賞のためには、最低でも20秒は縮める必要があった。

8月中旬、この辺りから、自分たちでミス指摘しあうようになってきた。隊員同士のコミュニケーションがとれ、

操法の動きを本当の意味で理解し始めていた。しかし、操法のタイムは伸び悩んでいた。いつまでも順調にいくわけではない。大会への重圧と、自分へのふがいなさに涙を流す隊員もいた。

9月上旬、隊員同士が具体的な指示を出すようになってきた。他人だけではなく、自分の動きも見えるように。また、本番を想定し、市消防団演習時に操法を披露。それまでのベストタイムを更新し、57秒を出した。大会まで残り1カ月、ようやく全国の舞台が見え始めた。

**気持ちは共に大舞台へ**

神原たけ子さん (米山支団班長)

私は、鈴木隊長と共に、2005年の米山町女性消防団の発足時から活動しています。それだけに、全国大会への思いは強くありました。自分が出られない分、隊員たちを全面的に支援することとしました。支団内で話し合い、なるべく負担をかけないようにしようと、一生に一度の大舞台、支援する私たちも一緒に参加し、仲間たちと思いを共にしたかったので。隊員たちは、週2回以上の訓練なので、支団での行事はなるべく免除しました。時間もですが、体力面でもかなりハードでしたから、訓練支援をしたときに「よく体が持った」と感じ、心配もしました。けがなく終わることができて本当によかったと思います。

大会にも当然応援に行きました。仲間たちは大舞台で、見事なポンプ操法を見せてくれました。立場は違えど、共に頑張ってきてよかったと心から思っています。

### 人として一回り成長



登米市消防本部 警防課 鈴木秀彦課長  
**Hidehiko Suzuki**

訓練開始時に「本番が終わった時、悔いのない訓練ができ、半年間続けてよかった」と支えてくれた全ての人たちに「支援してよかった」と思われるようにしようと、隊員に話しました。結果だけではなく、消防団員として、一人の女性として成長してほしかったからです。

4月から活動を開始し、ベテラン、新人に関係なく、基礎の基礎である規律訓練や基本動作を徹底しました。普段の訓練では問題のない動作も、大会ではより精度が求められるので、ポンプ操法も放水をせず、基本訓練を徹底しました。基本的な動作がしっかりしないと、タイムに影響するからです。放水まで時間がかかったため、隊員たちは「気をもんだ」と思います。

大会で良い操法をするためには、一人一人の努力はもちろん、選手6人が同じイメージを描ける必要があります。演技終了後、選手、隊員、応援団の誰もが涙を浮かべて抱き合っていました。その時、この半年間の取り組みは間違いでなかったと思えましたね。